遺児たちの作文

お父さん

小学五年　溝口　泰代

私は今年十二才ですが、父といっしょにすごしたのは、ほんの一年ぐらいしかありません。

私の頭の中には、父の思い出はぜんぜんなくて、写真で見る父しかしりません。

私が頭の中で想像する父は、すばらしい父です。

母の話では、父によく海岸へ自転車にのせられ、つれていってもらったそうです。なんとなく、その時の情景が頭にうかんできます。

父の顔には思い出がないのでうしろ姿で、私はにこにこしながら後ろに乗っているようなところがうかんできます。

もしタイムマシンのようなのがあって、いつでもすきな時にむかしにもどれたら、どんなにいいだろう、と思います。

四、五日前のことです。図工の時間に、友だちがふいに私にむかって、

「ねえ、溝口さん。お父さんいなくてもさみしくない」。と聞きました。私は

「一歳ぐらいの時からお父さんがいないから、お父さんがいるとどんなに楽しいのか、いないとどんなにさみしいのか、わからない。だから、いなくてもさみしいとは思わない。もし私が五、六歳ぐらいの時まで生きていてくれたのなら、さみしいと思うかもしれないけど」、とこたえると友だちは、「そう」、と言って私の方を見ていました。

私は、友だちにさみしくないと言ったものの、心の中では、やっぱり父がいてくれたらいいな、と思うときがときどきあります。今でさえいてほしい、と思う時があるほどですから、おとなになったらきっと、父がいなくてこまることがあると思います。

私のきおくのあるかぎりでは「お父さん」、と呼んだおぼえはありません。

「お父さん」。私のお父さん一度でいいから、おもいっきりあそんでもらったり、大きな声で「お父さん」、と呼んでみたりしたかったです。

×

泰代ちゃんのお父さんは、泰代ちゃんが生れて一年五カ月めに、あの大爆発でなくなられました。それからはお母さんの手で育てられましたが、早や小学四です。「大牟田市小浜北社宅一棟に、お母さんの富美子さんと二人で住んでいます。

母のくろう

小学四年　古賀　輝生

ぼくの父は、ぼくが生まれて三ケ月ぐらいで、三川鉱の爆発事故でなくなったそうです。だから、父の顔も知りません。

そのころの母は、ぼくを育てるのにいっしょうけんめいだったそうです。でも今は、ぼくも話し相手になってあげられるようになりました。

母は、仕事がいそがしく、帰りがおそい時はぼくは一人でまっています。時にはぼくがペコペコで、テレビを見ながらねむってしまうこともあります。

母は、仕事のことでいっしょうけんめいです。ぼくは、そんな母がだいすきです。

でも、ときどきかなしくなります。それは友達から、お父さんにどこかへつれていってもらった話をきいたりしたときなどです。

ぼくにも父がいたら、どんなに楽しいだろう、と思います。

今ぼくは、新聞配達をしています。知らないおばあさんに声をかけられ、はげまされる時はうれしくなります。

でも朝早いし、さむいし、雨の日など行きたくない時もあります。でも、母ががんばっているように、ぼくも父がいなくても、毎日くじけずにがんばりたいと思います。

×

輝生くんのお父さんは、輝生くんが零歳のとき、大爆発でなくなられました。ひとり子で、今は「荒尾市西原一〇〇三の一西島さん方」に、お母さんの智子さんとともに住んでいます。

付記

ここに、二人の遺児の作文を紹介しましたが、もともと三池大災害がつくり出した遺児はといえば、おびただしい数にのぼっています。それぞれに、このせちがらい世のなかで、とりどりの苦しみとたたかいながら、彼らは生きてきたのです。みんなで、いっそう励ましていきたいものです。

今年迎える〝13年忌〟

やっぱり思い出すあの日

遺族会会長　溝口生松

昭和五十年の新春を迎えまして、皆様のご健康をお祈り申し上げます。

昭和三十八年十一月九日、三井鉱山の保安無視により、三川鉱で炭じん大爆発を起こし、尊い人命を四百五十八人一瞬にして殺し、八百三十九人のCO中毒患者をだしてから十一年を経過致しましたが、来る年も来る年も悲しみと苦労の連続で、私ども遺族の気持はとうてい、筆舌でつくすことはできません。

とくに私は長男（二十五歳）と次男（二十三歳）の二人の子どもを同時に殺されましたことは、皆様がご存じの通りでご座います。

あのとき家に二つのお棺をならべてお通夜を済まし、いざ出棺となりますと、三川鉱人事から、長男は熊本の火葬場に、次男は福岡の火葬場に行くよう連絡がありました。

でも、生まれてから死亡するまで一度もケンカしたことのない、仲むつまじく育った子どもを、ここで分かれわかれにおくることは親としてしのびないことでした。また親戚の者も、そんなことはできないと反対したのでした。

そこで新港地域分会の、当時の相川分会長さんが何回も何回も社宅事務所へ足を運び、山口係員を三川炭人事まで交渉にやり、その結果二人とも福岡の方に行くようになりましたが、そのため出棺は午前一時になってしまいました。

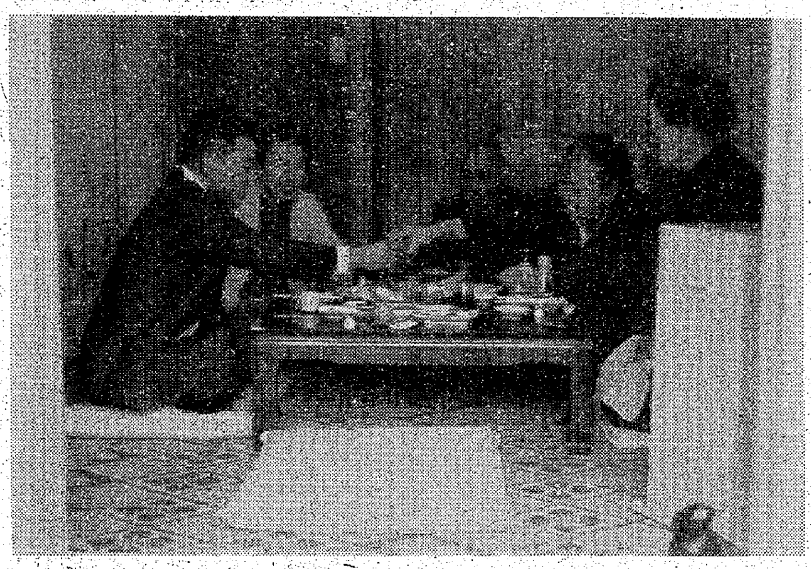
真夜中の道を福岡の火葬場に着き、二つのお棺をならべて火葬するときには、私は居ても立っていられない悲しみと怒りと憎しみで、胸がはりさける思いでした。

三週間位い経過してからでした。会社から、三川講堂まで遺品を受け取りにきてくれ、と連絡がありました。さっそく講堂にいって見ました。

それはそれは、大変なことでした。おどろいたことは、ムシロのうえに、衣類や弁当箱、水筒、鉄帽、工具袋、ノコやヨウキなど、軍隊でいうならば、ちょうど一個大隊位いの兵隊が上衣を脱いで、体操にでも出かけていったあとのようで、あの講堂いっぱい、足の踏み場もないほどならべてありました。私はそのさまを見まして、三井体育館にあのお棺が何百とならべてあったときにひきつづき、再度おどろいてしまいました。

三井鉱山が、これほど多勢の労働者を、一瞬のうちに殺したことを思い、改めて腹の底から怒りがこみあげてきて、この責任は必ず追及するぞと、そのとき固い決心をしたのでした。

今年はいよいよ十三年忌の命日を迎えます。一一・九と九・二八の被害者と原告団の統合に成功しました今年こそ、裁判闘争に全力を結集し、最後の勝利の日まで闘うことを誓い、全国の皆様のご指導とご支援・ご協力をお願い申し上げ、年頭のご挨拶と致します。



一パイ汲み交しながら、尽きぬ話。

果たして宮島家のお正月は

▼…師走の十五日の日曜日、CO患者の林田繁行さん、CO患者家族の会の塚本栄子さんと筆者（K）は、久しぶりに、重信さんの近去後とみにさびしくなった宮島さん宅をたずねました。

「果たして、やがてくるお正月を、どんなお気持でお迎えになるか」、と心配しながらでした。

▼…宮島さんは今、福岡県筑紫郡太宰府町大字観音寺字来木四百十番地一二十五に、住んでいられます。山ふところに近い団地で、ごく閑静なところ。太陽の陽差しが、ひときは明るくお住まいに射しこんでいました。

富太郎さんとイシさんのご両親は、大よろこびで迎えてくださいました。

聞けば新居は、次女の方の嫁ぎ先近くで、今は未っ子の伸二さんが同居、福岡の某企業に同家から通っていられるよし。

それと知って、ホッとしながら三人が顔を見合わせたものでした。

▼…お正月には、大阪で働いておいでの長女和子さんも帰ってこられるとか。

「十二年ぶりに、初めて自分の家でお正月ができます」お母さんはおっしゃいました。でも、「四人もいた男の子で、残ったのは末の子たった一人です。お正月にもまた、泣かんならんとでしょう」とのお言葉に、かえす言葉はありませんでしたが……。

万田作業所編集部騒動記

万田作業所　開田晃臣

「Kさん、この間電話で依頼した〝原告団〟の原稿はできているだろうか？」

年も押しせまった師走の二十四日の朝、新聞〝みいけ〟の編集の小崎さんからの突然の電話であった。師走の忙しさに取りまぎれて、そのことはキレイに忘れ果てていて、まったく申し訳のないことであった。

作業に取りかかる前の貴重な時刻を拝借して、とにかく、万田作業所の編集部員の方々に集まっていただき、いままでの諸事情を話し、「どうしようか、何かよい知恵はないものだろうか？」と、額を集めて相談してはみたものの、これといった良策もうかばず、ただ腕を組み、天井を仰いで「困ったなアー。どうするとよかろうか」と長歎息するのみであった。

「唄の文句じゃないけれど、忘れた私が悪いのです。Sさん、誠に無理なお願いですが、何とかお力添え願います」、

傍のS氏に哀願してみた。

S氏も「あまりに急で、そういわれても、いますぐには請け合いはできかねるなアー」との返事であった。考えてみれば、なるほど小崎さんから依頼されていたのは私であって、私のもの忘れを棚に上げてS氏にお願いする、そのこと自体がまったく理に合わぬ不届き至極な行為であり、S氏にしてみればおもしろかろうはずがない。

とにかく覚悟を決めて書きはじめてはみたものの、さて、何を書いているのやら、自分自身に判らないのだから他人に判ろうはずがない。

「たしか千字位いにまとめてくれ、とのことだったと思うが、千字は原稿用紙何枚書くとよかかネー」

何回となくたずねる。その度に「二枚と半分たいッ」と、誰かが叫ぶ。いやはや、てんやわんやのにぎやかさである。

「ほんなもんのごたる格好はしとるバッテン、やっぱり七級じゃなアー」

Hさんの声に、ドッと笑いのうずがわきあがる。

「そげーん笑うなら、書いてる者はトンチンマンチン食うて、ますます判らんごつなるじゃっカン」――編集部員のYさんがやり返す。まったく火事場ののようなさわぎである。

そのにぎやかなやりとりの中で遅々としてではあるが、原稿用紙のマス目は埋っていった。

「アナタ、コナタのお陸で何とかできあがろるバン」

いまや、ペンの走りにもよどみがなくなり、天井を仰いで思案することもメッキリと減った。

「えらーい騒動しよったが、ドウロコウロできあがりよるごたるナアー」

役員のHさんが肩越しにのぞいて、笑いながら言葉をかけてくれる。

「朝ッパチからえらい騒動をして、ほんに済まんやったナアー。まあ何とかなるゴタル」と、感謝の言葉を返す。

後少し、となって安どの余裕がでてきたのか、ヤカンの湯のわく音が聞こえてくるようになった。どうやら平常の私に戻りつつある様子である。

×

筆者は、ろもちんCO患者。